沖縄における犬フィラリアの浸淫状況について

末永　敏・国吉真栄・照屋尚夫・岸本高男
安里龍二・比嘉ヨシ子・下謝名和子

沖縄県下における犬フィラリアの浸淫状況についてはDirofilaria immitis感染犬が極めて少ないことが知られてはいたが，近年まで報告らしいものはみられなかった。Penningtonら(1969)は沖縄本島における野犬並びに米運用犬の犬フィラリア仔虫保有状況並びに媒介昆虫について報告し，沖縄本島にはDir. immitis 感染犬は極めて少ないが，日本からはそれまで全く報告されていなかったDipetalonema reconditum がかなり浸淫していることを明らかにした。

演者らは1972年9月5日から22日までの間，那覇市内にある沖縄県犬管理所に捕獲抑留されている野犬について耳朶から夫々30㎣の血液を採り，染色検鏡して仔虫の有無と種類を調べ，検血犬はすべて解剖して心臓内にDir. immitisの親虫がいるかどうかを調べた。調査した131頭の野犬の中17頭(約13%)がフィラリア仔虫を保有していたが，仔虫の種類はすべてDip. reconditumであった。尚，今回はDip. reconditumの親虫の検査はできなかった。

また，駐沖縄米軍軍用犬の犬フィラリア仔虫保有状況を知るために，米陸軍獣医部隊を訪問し，担当将校から資料を提供してもらって調べた結果，現在同部隊で飼養されている軍用犬 113 頭については徹底した健康管理が行われていて，犬フィラリア仔虫保有犬は皆無であることがわかった。

今回の調査結果により，日本復帰後間もなく沖縄，特に那覇市及びその周辺部には Dir. immitis 感染犬は極めて少ないが Dip. reconditum 感染犬はかなりいることが明らかになった。このDip. reconditumはアメリカ本土及びハワイ諸島に土着していることがわかっているので，沖縄へは軍用犬あるいは米軍族のペット犬と共に移入されたものと思われる。統計資料によると，本洲及び九洲と沖縄との間の犬の諭出入頭数は年毎に増加し，特に1967年からは急増しており，復帰に伴い動物検疫が廃止されたこともあって今後更に激増することが予想されるので，Dir. immitis 感染犬が沖縄へ移入され，既に媒介可能なことが明らかになっている土着の改種によって媒介される可能性がある。また逆に Dip. reconditum 感染犬が沖縄から本洲及び九洲へ移入され，土着のノミ等によって媒介される可能性も考えられる。

(寄生虫学雑誌　第42回　日本寄生虫学会大会特集号，Vol 22; 52，1973)